

ピアニスト小倉末子と大正期の女性運動

津 上 智 実

本論の目的は、ピアニスト小倉末子（1891-1944）が大正期に行った大阪での演奏活動と、同時代の女性運動との関わりについて明らかにすることである。

小倉末子は大正5（1916）年4月の帰朝後、東京と関西（神戸、京都、大阪）を軸に演奏活動を行ったが、大正8（1919）年7月から大正12（1923）年11月にかけて、5年連続で大阪中之島の大阪市中央公会堂の舞台に立った¹。当時、大阪市中央公会堂は大正7（1918）年11月に完成したばかりの近代建築で、定員2000人²の大きな演奏会場であり、ここでの演奏は社会的に大きな意味を持つものであったと推測される。そこで、この5年間の大阪市中央公会堂での演奏に焦点を絞り、これらの舞台がどのような経緯で成立し、どのような成果を上げたのかを明らかにした上で、それらが当時活発化しつつあった女性運動と緊密に連動していたことを示したい。

1）大阪市中央公会堂での演奏

小倉末子は、これまでの新聞記事や音楽雑誌記事等の調査によれば³、大阪市中央公会堂に都合6回出演している。その演奏機会、演奏曲目と新聞等における報道を整理すると、次の表1のようになる。

この表1から明らかなように、小倉末子は大正8（1919）年から大正12（1923）年まで5年連続で、計6回、大阪市中央公会堂のステージで演奏をしている。

表 1) 小倉末子の大阪市中央公会堂での演奏 (全 6 回)

<p>(1) ピアノ同好会／大阪楽友会主催「小倉末子女史、鈴木乃ぶ子女史出演大演奏会」(1919年 7 月 19 日、午後 7 時)：ベートーヴェン〈変奏曲〉ハ短調、ショパン〈幻想即興曲〉作品 66、〈スケルツォ〉作品 31-2、シンディング〈春のささやき〉、チャイコフスキー〈秋の歌〉、スコット〈黒人の踊り〉、サン＝サーンス〈グルック作曲「アルセスト」中の旋律によるカプリス〉 報道 5 回：『大阪朝日新聞』（7 月 13, 19, 20 日）、『大阪毎日新聞』（7 月 13, 20 日） 備考：(ピアノ同好会幹事：渋谷浪子、内藤周子) 大阪朝日新聞社と大阪毎日新聞社から花束</p>
<p>(2) 大阪朝日新聞社主催「第 2 回婦人会関西連合大会」(1920 年 10 月 25 日、正午) ブラームス〈ラプソディ〉第 1 番、作品 49、ショパン〈バラード〉作品 23 報道 8 回：『大阪朝日新聞』（10 月 16, 18, 19, 19, 20, 23, 25, 26 日）</p>
<p>(3) 大阪市教育会主催「東京音楽学校管弦合唱団大演奏会」(1921 年 6 月 2 日、午後 2 時と午後 7 時の 2 回公演) 大阪朝日新聞社後援／ベートーヴェン〈ピアノ協奏曲〉第 3 番、作品 37、第 1 楽章 (グスタフ・クローン指揮、東京音楽学校管弦楽団)⁴ 報道 13 回：『大阪朝日新聞』（5 月 20, 21, 22, 23, 24, 27, 28, 29, 31 日、6 月 1, 2, 3, 5 日）</p>
<p>(4) 大阪市北区女教員会主催「大阪女子音楽会」(1921 年 10 月 2 日、正午) 大阪朝日新聞社後援／シューベルト〈さすらい人幻想曲〉 報道 6 回：『大阪朝日新聞』（9 月 22, 25 日、10 月 1, 2, 3 日）、『大阪毎日新聞』（9 月 25 日） 備考：アンコールとして〈秋の歌〉(三木露風作詞、小倉末子作曲)、ショパン〈アンプロンプチュ〉を演奏、「ピアノは三木楽器店がドイツから最近輸入したという逸品」(10 月 3 日付『大阪朝日新聞』より)</p>
<p>(5) 大阪朝日新聞社主催「第 4 回婦人会関西連合大会」(1922 年 10 月 22 日、午後 1 時) スガンバーティ〈夜の曲〉、サン＝サーンス〈カプリス〉 報道 6 回：『大阪朝日新聞』（10 月 10, 11, 15, 19, 22, 23 日）</p>
<p>(6) 大阪朝日新聞社内全関西婦人連合会主催「関東大震災罹災者救恤演奏会」(1923 年 11 月 11 日、午後 6 時半)／(1)ベートーヴェン〈ソナタ (ワルドシュタイン)〉、(2)ショパン〈エチュード〉〈前奏曲 (雨だれ)〉〈スケルツォ〉、(3)ショパン〈幻想即興曲〉〈子守唄〉〈小唄〉、(4)ブラームス〈ラプソディ〉作品 79-1、ゴッショルク〈最後の望み〉、ドビュッシー〈前奏曲〉 記事 12 本：『大阪朝日新聞』（11 月 1, 5, 6, 8, 10, 11, 11 夕刊, 12, 21 日）、『東京朝日新聞』（11 月 22 日）、『読売新聞』（11 月 3, 30 日）</p>

この内、1920 年の「第 2 回婦人会関西連合大会」と 1922 年の「第 4 回婦人会関西連合大会」は、1919 年に発足した婦人会関西連合の年次大会における演奏であり、さらに 1923 年の「関東大震災罹災者救恤演奏会」も、婦人会関西連合会が名称変更した全関西婦人連合会の主催によるものであって、婦人会関西連合大会ないし全関西婦人連合会と直接的に関わっている。また、1919 年の「小

倉末子女史、鈴木乃ぶ子女史出演大演奏会」を主催した2団体の内、ピアノ同好会は大阪上流婦人の集まりであり、1921年の「大阪女子音楽会」も大阪市北区女教員会の主催によるもので、当時の女性運動との繋がりがあったのではないかと推測される。

そこで、まず婦人会関西連合大会ないし全関西婦人連合会の関連資料から検討を始めることとする。

2) 全関西婦人連合会と山岡家文書

関西婦人連合会については、石月静恵「全関西婦人連合会の成立と展開」『ヒストリア』第70巻（1976）、同『戦間期の女性運動』（東方出版、1996）（特に第1章「地域女性運動の展開」第1節「全関西婦人連合会」）、同「大阪朝日新聞にみる女性問題（2）—全関西婦人連合会に関する史料を中心に—」『桜花学園大学研究紀要』第5巻（2003）等の研究があり、その成立と変遷の詳細を知ることができる。

全関西婦人連合会は、1919年11月24日に大阪朝日新聞社が主催して「婦人会関西連合大会」を催したことによって始まり、「大正デモクラシーの中で、各地域女性運動の先駆的役割を果たしたと考えられる」⁵ 存在である。第5回大会（1923年）で「全関西婦人連合会」と改称し、第6回大会（1924年）直後から機関誌『婦人』（月刊）を発行、第9回大会（1927年）において大阪朝日新聞社から独立した組織形態となった。その後、1928年の大会が「御大典事業」のために中止になったのを除いて、第22回大会（1941年）まで継続しており、「この種の女性団体としては余り例を見ない長い歴史を有している」⁶。

これらの先行研究において、第1回大会（1919年11月24日）で久野久子のピアノ独奏と岩田さと子の独唱があったこと⁷、第2回大会（1920年10月25日）で小倉末子のピアノ独奏と武岡鶴代のソプラノ独唱があったこと⁸、第3回大会（1921年10月31日）で和泉千代子のピアノ独奏と柴田秀子の独唱があったことは述べられているが⁹、第3回大会の演奏曲目と第4回以降の大会でどのよう

な音楽的な催しがあったかについては言及されていない。

そこで、1919年の婦人会関西連合大会の発起人会で座長を務めた岸和田婦人会会長山岡春（1866-1964）の関係資料が、石月静恵や山田裕美らによって整理されて目録化¹⁰されているのを手掛かりに、2010年11月17日、岸和田城内に保管されている山岡春関係文書（全関西婦人連合会関連の49点）を閲覧する機会を得た¹¹。

その結果、山岡春関係文書の全関西婦人連合会関連49点（目録番号 C-1-1～49）中、5点（C-1-18, 23, 44, 45, 48）に音楽活動の記録が見出された。その内4点は全関西婦人連合会の大会プログラムで、第2回大会プログラム（C-1-18）では小倉末子のピアノ独奏と武岡鶴代のソプラノ独唱（ピアノ伴奏、宇佐見ため子）、第3回大会プログラム（C-1-23）では和泉千代子のピアノ独奏と柴田秀子のアルト独唱（ピアノ伴奏、榊原直）、第4回大会プログラム（C-1-44）では斎藤英子のソプラノ独唱（ピアノ伴奏、榊原直）と巽清次郎のテノール独唱（ピアノ伴奏、ミルトン・シーモア）、小倉末子のピアノ独奏、そして松竹楽劇部少女団20余名の新舞踊の計4ステージ、第7回大会プログラム（C-1-48）では、「会歌発表」（八木梅子作歌、近衛秀麿作曲）、「管弦楽演奏数番（曲目は未定）」（近衛秀麿指揮）、「独唱数番」（矢追婦美子、伴奏近衛秀麿）があった他、ロシア人キチー・スラヴィナ主演の劇「サロメ」1幕と、スラヴィナ3姉妹による舞踊の計5ステージあったことが明らかになった。演奏曲目を含めて、その内容をまとめると、次ページの表2のようになる。

以上のように、全関西婦人連合大会においては、毎回、各支部の報告や有識者の講演の後、ピアノ独奏や独唱、舞踊などの音楽プログラムが組み込まれていた。それらが例外なく洋楽であったのは、近代的な女性の意識改革を目指す運動の趣旨に沿うものと洋楽が捉えられていたからであろう。「新しき婦人」のイメージを具現化するに当たっては、伝統的な琴や三味線を弾く女性ではなく、ピアノを弾く女性や、ピアノ伴奏で歌う女性こそがふさわしいと考えられたと推察される。

表2) 山岡春関係文書に見る音楽プログラム(5点)

<p>C-1-18『第2回婦人会関西連合大会〔プログラム〕』(1920年10月25日)</p> <p>講演4本:東京朝日新聞記者竹中繁子「東京婦人界の現状」、早稲田大学教授杉森孝次郎「新しき時代の常識の一部としての愛国心の進化」、東京女子高等師範学校助教授千葉野安良「新しき建設の為に」、京都高等工芸学校教授本野精吾「楽しき生活」</p> <p>一、ピアノ独奏、東京音楽学校教授、小倉末子、(一)ブラームス作曲ラプソディー作品49、(二)ショパン作曲バラード作品23</p> <p>一、上高音独唱、武岡鶴代、ビゼー作歌劇「カルメン」中のミカエラの歌、ロッシーニ作歌劇「セヴィリアの理髪師」中のロジーナの歌、以上二曲二場、伴奏者、宇佐見ため子</p>
<p>C-1-23『第3回婦人会関西連合大会〔プログラム〕』(1921年10月31日)</p> <p>講演3本:大阪朝日新聞編集局長高原操「華盛頓会議について」、ガントレット恒子「婦人と平和」、東京帝大文学部助教授大島正徳「社会政策と婦人」</p> <p>ピアノ独弾、東京、和泉千代子、ショパン〈ロンド〉作品16¹²</p> <p>独唱、東京、柴田秀子、(一)ヴェルディ作歌劇《トロヴァトーレ》中のカンツォーネ、(二)ゴダール作フロリアンの歌、(三)ビゼー作歌劇カルメン中のハパネラ、伴奏:東京、榊原直</p>
<p>C-1-44『第4回婦人会関西連合大会〔プログラム〕』(1922年10月22日)</p> <p>講演4本:大阪朝日新聞編集局長高原操「倫理的規範の拡充」、大阪朝日新聞専務取締役法学博士下村宏「欧米より日本の婦人を顧みて」、尾崎行雄「日本婦人の長所短所」</p> <p>一、ソプラノ独唱、斎藤英子、ベートーヴェン作〈汝を愛す〉〈くちづけ〉、シューベルト作〈さまよえる人〉(伴奏、榊原直)</p> <p>二、テノール独唱、巽清次郎 ゴーリング・トーマス〈樹の間吹く風〉、パオロ・トスティ〈さらば〉、カザリン・グレン〈たそがれ〉、ブルノー・フーン〈不屈〉(伴奏、ミルトン・シーモア)</p> <p>三、ピアノ独弾、小倉末子、スガンバーティ作〈夜の曲〉、サン＝サーンス〈カプリス〉</p> <p>四、新舞踊、松竹楽劇部少女団30名、「小さき謀反」(2場)(謀茂都陸平振付、原田潤作曲)、「時」(ドン・ケリー作曲)</p>
<p>C-1-45『東京音楽学校管弦合唱団大演奏会曲目梗概』(1922年10月26日、大阪中之島中央公会堂、グスタフ・クローン指揮)</p> <p>一、管弦楽、ヴァーグナー作曲、歌劇ニルンベルクの平民詩人の前奏曲</p> <p>二、混声合唱(無伴奏)、シューマン作曲、夢(作品146-3)、メンデルスゾーン作曲、雲雀の歌(作品46-4)</p> <p>三、管弦楽、ベートーヴェン作曲、へ長調交響曲第8番、作品93</p> <p>四、合唱独唱及び管弦楽、ロッシーニ作曲、聖母哀悼の聖歌</p>
<p>C-1-48『第7回全関西婦人連合会代表者会提案』掲載「第7回全関西婦人連合大会順序」(1925年10月25日)</p> <p>講演2本:柳宗悦「童貞の宗教的意義」、市川房枝「婦人運動のプログラム」</p> <p>音楽、「会歌発表」(八木梅子作歌、近衛秀麿作曲)、「管弦楽演奏数番(曲目は未定)」(近衛秀麿指揮)、「独唱数番」(矢追婦美子、伴奏近衛秀麿)</p> <p>劇「サロメ」1幕(露国人キチー・スラヴィナ主演外、助演男女露国人10数名)</p> <p>舞踊「人形の遊び」(アンナ・スラヴィナ、キチー・スラヴィナ、ニーチ・スラヴィナ共演)</p>

第1回から第4回までの大会で独奏したピアニストはいずれも女性で、第1回では久野久子がリスト、ショパンとベートーヴェンを弾き、第2回では小倉末子がブラームスとショパン、第3回では和泉千代子がショパン、第4回では再び小倉末子がスガンバーティとサン＝サーンスを演奏している。ここから当時の小倉末子の人気が伺われると共に、ブラームスやショパンといったロマン派のピアノ曲だけでなく、スガンバーティ（1841-1914）やサン＝サーンス（1835-1921）といった近代の楽曲（当時としては現代曲）も弾かれていたことは注目に値する。

第4回大会に出演した小倉末子について、1922年10月15日付『大阪朝日新聞』は「小倉末子女史が同じ音楽学校教授たる久野久子女史と共にピアニストの双壁であると共に帝都楽壇の最高權威たることは今更申すまでもありません。久野女史の勁健熱烈な奏法に対し、小倉末子女史の弾法は何処までも清純にして麗明、そのタッチの美しいことは殆ど天稟とも言ふべきであります。しかもそのステージの真剣さと音楽奉仕者としての敬虔な態度は女史の技巧に一層の奥床しさを加えています」と伝えており、当時この二人のピアニストがどのように捉えられていたか、その評価の一端を垣間見させてくれて興味深い。

3) ピアノ同好会の演奏会（1919年7月19日）

ところで、山岡家文書には第1回大会の『発起人会出席代表者〔名簿〕』（C-1-3）が含まれている。これを見ると、近畿、山陽、東海、北陸、九州の西日本2府23県から200名以上が、大会当日午前中の発起人会に出席したことが分かる。代表者の所属団体は、国公立の女学校の同窓会、基督教や仏教関係の宗教婦人団体、地域婦人団体など多様であるが、大阪からの参加団体の筆頭に「大阪婦人十日会」、続いて「ピアノ同好会」の名があるのが注目される。

「大阪婦人十日会」は、大阪朝日新聞社の恩田和子が「奔走して編んだ」会で、「婦人の覚醒、智識の向上」を標語として毎月十日に例会を持つことから名付けられた会である¹³。恩田和子（大阪朝日新聞記者）は関西婦人連合大会

を組織し、その後、西日本各地を回って各地での婦人連合の活動を支援した人物であるから、この大阪婦人十日会は婦人会関西連合大会の開催に当たって核となる団体であったと考えられる。

ピアノ同好会は「ピアノ音楽の振興を計り会員の趣味技能を向上せしめ高潔優美の趣味を涵養し会員相互の親睦を計るを目的」¹⁴として設立された団体であるが、『発起人会出席代表者〔名簿〕』で大阪婦人十日会に次いで2番目に挙げられているところから、大阪の婦人界において単なる趣味の会を越えた重要性を持っていたのではないかと推測される。

ピアノ同好会からの出席代表者としては「高安安子、横尾静子、中江百合子、渋谷浪子¹⁵、瀧本愛子」の5名が挙げられているが、この内、高安安子¹⁶は「梅田高女同窓会」、横尾静子は「東京女子英学塾大阪支部」の代表者としても名前が掲載されており、出身校の異なる女性たちが「ピアノ」を中心として繋がっていたことが見て取れる¹⁷。

なお、第2回以降の大会では、代表者会への出席を各団体1名に限ったので、このような広がりや繋がりを読み取ることはできない。『第2回婦人会関西連合大会代表者〔名簿〕』（C-1-14）には「9番：ピアノ同好会、内藤周子」、『第3回婦人会関西連合大会代表者名簿』（C-1-21）には「2番：ピアノ同好会、葛野しの子」、『第5回婦人会関西連合大会代表者席番号表』（C-1-49）には「59番：ピアノ同好会、内藤周子」とあり、これらの大会にピアノ同好会として代表者を送っていたことが分かる¹⁸。

大正8（1919）年7月19日の「小倉末子女史・鈴木乃ぶ子女史出演大演奏会」は、塩津洋子の研究（注14参照）によれば、ピアノ同好会が大阪市中央公会堂で初めて行った演奏会である。落成間もない近代ホールでの初めての演奏会は、主催者側として誇らしいものであったのだろう。同年同月21日付『大阪毎日新聞』には、ピアノ同好会について、「当地の洋楽好きの婦人達から組織されたもので現在の会員は百数十名を数え、『同好会の後援がなくては大阪で何事の芸術的活動をもすることが出来なくなるでしょう』と自負している」とい

う記事が写真入りで掲載されている¹⁹。

翌年（1920年）1月、ピアノ同好会は、それまでピアノの備え付けのなかった大阪市中央公会堂にグランド・ピアノ1台とアップライト・ピアノ1台を寄付しているので²⁰、それまでは持ち込みのピアノで演奏したものであろう。

この1919年の演奏会については、『大阪朝日新聞』に3本と『大阪毎日新聞』に2本の記事があり、「近来稀な大盛会で主催者側のピアノ同好会、楽友会両会員を始め花のような聴衆でさしにも広い会場もいっぱいに満たされていた」（7月20日付『大阪毎日新聞』）、聴衆の中に「東京音楽学校ショルツ氏が魚崎の友人パール氏方に来遊の機を利用して来会し熱心に耳を傾けていた」（7月20日付『大阪朝日新聞』）と伝えられている。

小倉末子については、来阪の列車中に朝日新聞の記者が取材に出向き、留学中の話や演奏曲目についての話だけでなく、その装いについても、「何時も見慣れたあのキリッとした洋装とは打って変わった優美な和服姿、青磁色の派手な縦縞、明石の薄物を身に纏って、翡翠の帯締めとダイヤの指輪がキラリと輝く、温雅な物腰、謙虚な態度で語る」と報道されている（7月19日付）。翌日付の『大阪朝日新聞』でも「前日の和装をサラリ脱ぎ捨てて、薄桃色の洋装、目も覚めるばかりに扮装した小倉末子女史」と報じられており、小倉末子の装いが当日の人々の関心を惹いていたことが察せられる。

4）北区女教員会主催の大阪女子音楽会（1921年10月2日）

一方、1921年10月2日の「大阪女子音楽会」を主催した北区女教員会の名は、第1回（1919年）と第2回（1920年）の連合大会代表者名簿には見当たらず、第3回（1921年）大会が初出である。山岡家文書の『第3回婦人会関西連合大会代表者名簿』（C-1-21）に「32番：北区女教員会、横見たづ」、『第5回婦人会関西連合大会代表者席番号表』（C-1-49）に「218番：大阪市北区女教員会、林りつ子」との記載がある。

この演奏会は、「大阪市内小女学生七百名を出演者とした大阪未曾有の新し

い試み」で、「長い行列を作って雀踊しながら四方から公会堂に押し寄せる嬢ちゃん達の他に女教員、同窓会員、勤労婦人、父兄母姉全部を合して五千名」(10月3日付『大阪朝日新聞』)の来場という大規模な催しとなった。

9月25日付『大阪朝日新聞』掲載のプログラムを見ると、小学生と女学生の出演は大半が歌(独唱、斉唱、三部合唱、四部合唱)で、器楽演奏は「曾根崎小学校5年生、佐藤淑子、ヴァイオリン独奏、ホームスイートホーム」「梅田高等女学校4年生、加納ふさ子、ピアノ独奏、アンプロンプチュ(変イ調[ママ])」「同4年生、櫻根とし子、武富園生、ピアノ連弾、アンダー、ゼ、バナー、オヴ、ヴィクトリー」の3番のみである。「女学生と女教員は各20分、小学生は各5分宛の予定で、それに小倉末子女史のピアノ独奏と長坂好子女史の独唱に30分ずつ」とされ、第1部に16番、第2部に19番の出し物があり、休憩を挟んで「ピアノ独奏、東京音楽学校教授、小倉末子女史、デル、ワンダラー、シュベルト作[ママ]」と「独唱、東京音楽学校助教授、長坂好子女史、歌劇ノルマの中「天の女王」ペリニ作」が告知されている。

演奏会翌日(10月3日付)の同紙によれば、5分の休憩の後、まず長坂好子が歌劇ノルマ中の「天の女王」を独唱し(「清麗にして強い力のある歌い振りは小倉女史の伴奏によって一際人々の胸に食い入る」)、アンコールとして三木露風作詞、小倉末子作曲の歌曲「秋の歌」²¹を歌い、続いて小倉末子が予定されたシューベルトの〈さすらい人幻想曲〉に加えて、アンコールとしてショパンの〈アンプロンプチュ〉を弾いた。正午開演で午後4時終演という長大な演奏会であった。

演奏会前日(10月1日付)の同紙には「いよいよ明日二日」と銘打った予告記事が掲載され、その中で「殊にこの会の最終を飾るべき小倉末子女史のピアノ独奏シューベルトのワンダラーは女史の最も得意な、旋律の素的に美しい奮い付きたいほどのなつかしい抒情曲である、今、洗練の極地にある女史独特の弾法の冴え、その繊細な指先に躍り出る旋律の美は思っても胸のときめきを覚える」という期待と共に、「小倉女史は今朝八時着阪の筈」と移動の予定まで

報道されており、小倉末子が話題性の高い人物であったことを窺わせる。

5) 関東大震災罹災者救恤演奏会 (1923年11月11日)

小倉末子が大阪市中央公会堂で行った最後の演奏会は、大正12 (1923) 年11月11日の「関東大震災罹災者救恤演奏会」である。これは同年9月1日に発生した関東大震災によって罹災した人々の蒲団代を募集するために行われたもので、その発端について、同年11月1日付『大阪朝日新聞』は次のように伝えている。

寒さに悩む関東幾十万の同胞に温かき夜具を送るため、全関西婦人連合会に於て大運動を起したところ、各方面の美しい同情は轟然として集まり、既に金と現品を寄贈されるもの多く、各会員は斯くしてその努力が世の正しき理解と同情によって酬いられつゝあるを衷心感謝しています。然るに今回東京音楽学校教授にしてわが楽界最高の権威者たるピアニスト小倉末子女史は非常にこの運動に感激し、自ら起って義捐音楽会を大阪で開き、その収入の全てをあげてこの義金に加えたいという申出がありました。婦人連合会では喜んで女史の真心を受けることになり、来る十一月十一日午後六時半より中之島中央公会堂に於て同女史のピアノ大演奏会を開くことに致しました。女史はこの演奏会のためわざわざ東京より下阪されるのですが、自ら一切の費用を節し、全収入をこの夜具募集に寄附されることになっています。これ既にこの音楽会が重大なる意義を有しているのみならず、女史はこの機会において多年修練を積み来ったベートーヴェンの大曲を始め、ショパン、ブラームス等の抒情曲を弾奏して、同胞の救恤に努めつゝある関西の人々の努力に驢（はなむけ）せんとの意気込みであり、又この挙に対し音楽学校長等も凡ゆる援助を与えられることになっています。思えば震災以来関西にも久しく音楽会らしい音楽会が開かれず、音楽愛慕者の魂は楽界巨星の美しい演奏を思慕してやみません。この秋に当

たって小倉末子女史を大阪に迎え、親しくその清麗無比の弾奏を鑑賞し得るのは非常な幸というべきであります。[下線筆者]

ここから、この演奏会が小倉末子の方から言い出されたものであること、それを全関西婦人連合会が受けて実現に至ったことが伺われる。主催は「大阪朝日新聞社内全関西婦人連合会」とされている。

その後、この演奏会に関する記事が『大阪朝日新聞』に頻繁に掲載される(11月1, 5, 6, 8, 10, 11, 11夕刊, 12, 21日の計9回)。11月6日の記事は「名曲の美と奏法の冴え」と題され、「女史は独逸留学中かのヨアヒムと共に独逸近代の楽聖として知られた伯林(ベルリン) ホッホシュレーのバルト教授について厳しき指導を受けた人で、殊にベートーヴェン、ショパン等の曲目に対する深きインタープリテーションと清麗な奏法の冴にはわが楽界に於る一驚異であると言われている」と伝えた上で、小倉末子の次のような談話を掲げた。

女史は『私の学びましたバルト教授はベートーヴェンの曲が最もお得意だっただけに、その教授法もほんとうに厳しいものでした。運指法から句切から強弱音の表し方に針一本ほどの違いがあってもやかましく申され、厳しくお叱りになったものです。ショパンのようにロマンチックなものは弾くものの感情でいろいろに表情が変わってもさして目立ちませんが、ベートーヴェンのようなクラシックなものは少しの斟酌も出来ません。それだけ難しうございます』と語っている。

ここで印象づけられるのは、小倉末子のベートーヴェン演奏の正当性であり、それは優れたピアノ教師として名声の高かったハインリッヒ・バルト(1847-1922)の薫陶を受けたことに裏打ちされている。

演奏曲目で注目されるのは、ゴットシャルク(ないしはゴツチョルク)の〈最後の望み The Last Hope〉である。「ゴツチョルクの曲はこれまで余り公開的に

演奏されたことを知らない。今度弾く『最後の望み』は女史が毎夜密室に跪いて祈祷する如く定まって弾いた寂しい詠歌的な曲（11月6日付）、「女史が毎夜母の祭壇に跪いて祈るような心地で弾いていると云うなつかしい曲」（11月11日付、夕刊）、「女史が敬虔な晩祷の心持で弾く」（11月12日付）と繰り返し報道され、演奏会の主旨と演奏者の姿勢を象徴的に示すものとなっている。

出演者の動静についても次々と報道されている。まず、11月11日付の夕刊で「女史は姉君と一緒に今晚の夜汽車で西下、明日の朝着阪と同時に更に更に練習をして会に出るという大層な意気込みです」と伝えられ、追って11月11日付の朝刊で次のように伝えている。

小倉末子女史は今朝来阪する予定のところ、この日全日を練習に費やすために急に時間を繰上げ昨夜八時十二分の特急で姉君マリヤさん同伴で大阪駅に着いた。すぐ大阪ホテルに入って、女史は快活に「関西婦人連合会の皆様が東京、横浜罹災民救恤のため御熱心に活動され、今後なくては凍死する外はない蒲団の大募集にありたけの手段を尽くされているとお聞きして、それこそ私の方からお願いして義捐音楽会を開いて戴かねばならぬこととなったのです。地震当時は私も食物の心配や遠い所へ水汲みに行くなどして、殆んど五十日ほどおちつきませず、ピアノの練習一つ致しませんでした。先月十五日初めて久し振りで鍵盤に手を触れましたが、大阪での演奏は私にとって九月以来、初めての公演です。そしてそれが幾分でも東京横浜の罹災された皆さまに酬いることになるかと思うと、今までに覚わぬ重い責任を感じますので、私の力のあらん限り力一杯に演じます」と熱心に語った。

演奏会翌日（11月12日）の紙面でも「女史は学校の授業が遅れて一日の暇もないのに拘らず、尊い日曜日を無理に割り犠牲的に来阪されたものであったが、演奏後直ちに帰京した」と伝えて、演奏者の献身的な取組みの姿勢が強調

されている。

この救恤演奏会の成果については、3紙に報道が見出される。まず、11月21日付の『大阪朝日新聞』で「『音楽会収入』去る11日全関西婦人連合会主催で大阪中央公会堂に於いて開催の小倉末子女史大演奏会は小倉女史に対し演奏料を贈ったところ全部寄贈になりました。それで1463円2銭の純益を得、これを寝具費中へ受け入れました」、11月22日付の『東京朝日新聞』でも「『蒲団演奏会上り高、1460円』去る11日関東へ寝具を贈る運動の一として大阪朝日新聞の社内全関西婦人連合会の主催で東京音楽学校教授小倉末子女史の大演奏会を開催したが、その総収入1905円、その内公会堂借入礼金電気代下足入場券代小倉女史汽車賃等に441円98銭を支払い、差引純益1463円2銭を得、全部寝具費中に寄託することにした。因に主催者より小倉女史に対し演奏料を送ったところ同女史は寝具費中に入れてくれと言って辞退した（大阪電話）」、また11月30日付の『読売新聞』では「『小倉末子女史』過般関西の独奏会で得た1600円をこのほど罹災者救済金に義捐した由」と報道されている。

以上から、この演奏会が全関西婦人連合会主催で行われたことは明らかであるが、従来の女性運動研究では、この小倉末子の救恤演奏会については言及がない。石月静恵『戦間期の女性運動』（55頁）では、この年の全関西婦人連合会の活動について、次のように総括されている。

第5回大会（1923年10月16日）は関東大震災の起こった年であり、大会開催前も含めて連合会の活動が展開された。そのことも手伝い、「会員多数の申し出により『婦人会関西連合会』を『全関西婦人連合会』と改称の件」が提案され可決された。10月16日の大会で改称され、同月18日には全関西婦人連合会の名称で震災地救済のために、蒲団と毛布の募集が行われた。この募集は、大会での講演者賀川豊彦の訴えに応えたものでもあった。続いて10月30日を「全関西婦人デー」とし、大阪心斎橋の大丸呉服店でバザーと募金を行った。ここで集められたものは、これまでの救援品と同様

に東京連合婦人会によって受け取られ配布された。なお、この東京連合婦人会は、奥むめおの「我国の婦人運動」によれば、全関西婦人連合会に「刺激されたものであることは云うまでもない」とのことであった。

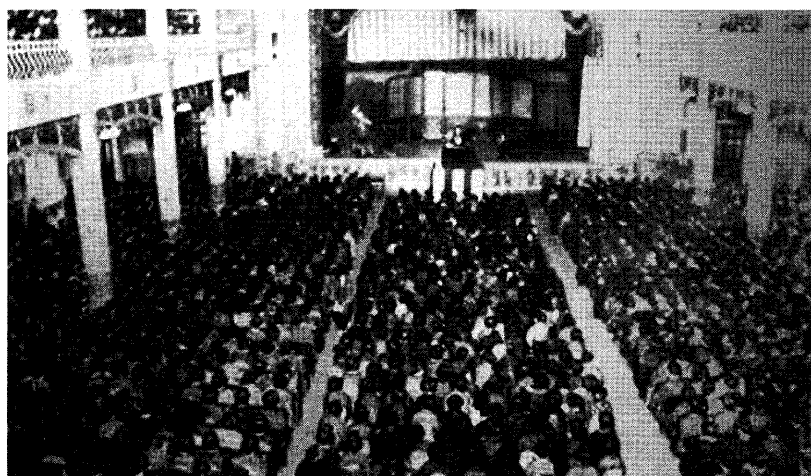
かくして、関東大震災後の婦人会の救援活動は、関西では「婦人会関西連合」が「全関西婦人連合会」へと結束を固める契機となり、関東ではそれまで実現しなかった連合婦人会の結成をもたらし結果となった。その成果の一端として、同書86頁には「11月22日、全関西婦人連合会、救援の蒲団1800枚送出、東京連合婦人会受取配布」とあるが、この蒲団送出に当たっては、11月11日の小倉末子の救恤演奏会で得られた義捐金も当然活かされたものと考えられる。

6) 大正期の女性運動と音楽

以上の考察によって、1919年のピアノ同好会主催の大演奏会を皮切りに、1920年の第2回関西婦人会連合大会、1921年の北区女教員会主催「大阪女子音楽会」、1922年の第4回関西婦人会連合大会、1923年の関東大震災罹災者救恤演奏会に至る5つの演奏会が、いずれも当時活動を活発化しつつあった女性団体と深く結びつきながら行われたことが明らかになった。

しかも、これらの演奏会はいずれも非常に多くの聴衆を集めたと記録されている。主催者側の発表には多少の誇張もあると思われるが、1919年の演奏会については、ピアノ同好会と共同主催した楽友会の伊達俊光が「大阪市中央公会堂で始めて公開の音楽会を催し、ピアノ同好会から中江百合子夫人、楽友会から私が司会者として挨拶し、非常の盛会であった」と記している²²。新聞も「ぎっしりと詰まった聴衆」（1919年7月20日付『大阪朝日新聞』）、「近来稀な大盛会…さしにも広い会場も一杯に満たされて居た」（同日付『大阪毎日新聞』）と伝えている。1921年の「大阪女子音楽会」には、上述のように、5000人の来場者があったと言う。

婦人会関西連合大会も、第1回から4000人を集め、毎回多くの参加者を集め



第3回婦人会関西連合大会記念
絵葉書
中之島公会堂
昭和十一年十月二十日

「第3回婦人会関西連合大会記念」絵葉書（第2回大会時の写真）

た。第3回大会時に記念品として配布された絵葉書が山岡家に残っているが（C-1-30）、よく見ると舞台上に掲げられた講演タイトルが「楽しき生活」とあるところから、この写真は小倉末子が出演した第2回大会時のものであったことが分かる（上掲の写真参照）。中之島公会堂にぎっしり詰まった婦人たちは、西日本各地で婦人会活動の中心を担っている女性たちであり、これらの人々が小倉末子の演奏を聴いたのである。

そもそも当時の女性運動において、音楽は人々を惹き付ける大きな魅力として働いていた様子が見える。とりわけ初の婦人会関西連合大会が行われた大正8（1919）年から翌年にかけて、すなわち関西各地の婦人会が次々と集まって連合体となっていく過程において、音楽は大きな場所を占めていた。それをよく示すのが、第2回（1920年10月）婦人会関西連合大会で配布された『関西各地婦人会状況報告』（山岡家文書 C-1-13）である。ここには、1919年12月10日

表3) 音楽的催しを含む婦人(連合)大会(1919~1920年)

C-1-13:『関西各地婦人会状況報告』(第2回(1920年)婦人会関西連合大会で配布)(30件中21件)
堺連合婦人大会(1919年12月10日、堺大浜公会堂、講演4本、ヴァイオリン、独唱、合奏等)
敦賀婦人大会(1919年12月20日、南尋常小学校、講演2本、ピアノ独奏、ギター、合奏等)
徳島婦人大会(1920年1月18日、徳島公園滴翠園、講演2本、エンゲル音楽園の音楽)
愛媛県婦人連合大会(1920年1月24日、松山市県公会堂、講演2本、和洋音楽会)
姫路婦人大会(1920年2月8日、姫路高等女学校、講演4本、ヴァイオリン、独唱、箏曲等)
広島県連合婦人大会(1920年2月11日、崇徳教社、講演4本、東元子女史の筑前琵琶)
三重県婦人連合大会(1920年2月22日、津市県会議事堂、講演4本、音楽等)
鳥取県連合婦人大会(1920年3月7日、鳥取高等女学校、講演3本、ピアノ、ヴァイオリン等の音楽)
和歌山県婦人連合大会(1920年3月13日、城内和歌山倶楽部、講演2本、音楽等)
奈良県婦人大会(1920年4月11日、奈良公会堂、講演3本、仕舞、琵琶等)
敦賀婦人大会(1920年4月11日、萬象園、講演2本、音楽会)
近畿地方婦人連合大会(1920年4月17日、京都市岡崎公会堂、講演2本、狂言、児童唱歌、三曲合奏等)
四国地方連合婦人大会(1920年4月25日、高松市公会堂、講演3本、音楽会等)
呉婦人連合大会(1920年4月26日、呉座、講演2本、独唱、合唱)
九州地方婦人連合大会(1920年5月2日、福岡県第一公会堂、講演4本、音楽会)
山陰地方婦人連合大会(1920年5月23日、松江市高等女学校、講演3本、音楽会)
山陽地方婦人連合大会(1920年6月13日、岡山市後楽園鶯鳴館、講演3本、吉備舞、音楽等)
北陸地方婦人連合大会(1920年6月20日、会津市県公会堂、講演3本、音楽等)
京城婦人連合大会(1920年6月20日、京城日出小学校、講演3本、李王職音楽隊の演奏)
近畿地方婦人連合大会(1920年6月27日、神戸青年会館、講演1本、ハクソン嬢の独唱、その他音楽等)
京都連合婦人大会(1920年6月27日、岡崎公園公会堂、講演2本、ピアノ弾奏)

の堺連合婦人大会から1920年7月4日の釜山婦人会に至るまで、東海、近畿、四国、九州、山陰、山陽、北陸、各地の婦人(連合)大会でいつ、どのような催しを実施したかが簡潔に報告されている。この報告書から音楽的な催しを含む大会を書き抜くと、表3のようになる。

表3が示すように、1920年の活動報告書に掲げられた大会全30件中21件までが音楽的な催しを含んでいた。各地の女性たちを集め、婦人会を集結させて連合体として組織していくに当たって、音楽的な催しは人々を惹き付けるのに大きな力を発揮したと見える。もっとも、表3の中でピアノを挙げているのは、敦賀婦人大会、鳥取県連合婦人大会、京都連合婦人大会の3件のみで、当時はピアノがまだまだ希少であったことも同時に察せられる²³。

前述のように、第6回大会（1924年）直後に機関誌『婦人』が発行された。その創刊号（1924年12月）の巻頭に「全関西婦人連合会の発生と歴史と事業」と題して、第1回から第5回までの大会の概要が回顧されている²⁴。それを見ると、第5回大会（1923年）は第2部で関東大震災の映画「大朝社活動写真班撮影の大震災フィルム」を上映したのみで、音楽的な催しは（自粛されたのか）行っていない。一方、翌年の第6回大会においては、午後4時から「音楽」、午後6時半から「新舞踊」（松竹楽劇部員出演）、午後8時20分から活動写真「女性の悩み」と盛り沢山であった。「音楽」は10ステージ2部構成で、第一部では、1）ハイドンの弦楽四重奏曲第43番（演奏は、ヴァイオリン平井誠、橋田拌、ヴィオラ作間毅、チェロ田崎信次）、2）「セビラの理髪師の内ロジナの歌」（ソプラノ早川美奈子）、3）ショパン作曲「幻想即興曲」（ピアノ濤川瀧江）、4）グルック作曲歌劇オルフェオ中のオルフェオの歌（アルト幕田品子）、5）ベートーヴェン弦楽四重奏曲作品24の1、第二部では、1）チャイコフスキー、モーツァルト、マスカーニ、ラフーポーシヨンの小品（弦楽四重奏、同上）、2）レーマー〈公爵夫人よ君はよく舞う〉、ブラームス〈子守唄〉（幕田品子）、3）ベートーヴェン〈ロマンス〉作品40（平井誠）、4）ベートーヴェン〈悲愴奏鳴曲〉（濤川瀧江）、5）シューベルト〈小夜曲〉、トセルリー〈黄昏曲〉（早川美奈子）が演奏された。なお、『婦人』第2巻第10号には、第7回大会で発表された全関西婦人連合会会歌〈あけぼの匂う〉（八木梅子作歌／近衛秀麿作曲）のピアノ伴奏譜と、会歌発表のステージ写真、会歌吹き込みの録音風景の写真（御門種子と八木笑子の歌、近衛秀麿のピアノ）が掲載されている。

機関誌『婦人』に目を通して印象的なのは、女流ピアニストの訃報が大きく扱われていることである。まず、創刊号（1924年12月号）には「天才ピアニスト濤川瀧江嬢の訃報」という記事があり、第6回大会に出演したピアニストの濤川瀧江が、帰京後すぐに盲腸炎で亡くなったことを伝えている。また、第2巻第5号（1925年5月号）には「久野久子女史の自殺」が掲載された上、「ピ

アニスト久野久子女史の自殺について」の読者の投稿が（婦人選挙権に対する意見、準備、覚悟と並んで）募られて、次号（同年6月号）に「樂聖終焉の地に死んだ女史」「永遠の生へ」と題する投稿記事2本が掲載された。さらに、同第8号（同年8月号）に「遺骨を迎えるに際して、久野女史を忍ぶ、ベルリンにありし日の思い出」という記事が鍋平朝臣の名で書かれ、同9号（同年9月号）に「神戸に着いた久野久子女史の遺骨」とキャプションのついた写真が掲載されるというように、非常に大きな扱いとなっている²⁵。当時の女性たちにとって、ピアニストという存在がいかに大きなものであったかを強く感じさせる。

石月静恵は『戦間期の女性運動』において、「雑誌『青鞥』発刊（1911年）当時、「新しい女」はまだ一部の女性だけの誇りであった。1919年11月24日、この日婦人会関西連合大会に参加した「四千余人」の女性たちは「新しき婦人」として胸を高鳴らせ、講演に拍手を送り、演奏に聞き入ったのである」（55頁）と述べている。当時の先進的な女性たちにとって、ピアニストというのは女性の新しいあり方として、一つのシンボリックな存在だったのではないだろうか。

『婦人』創刊号の第1頁には、「全関西婦人連合会申し合わせ」が次のように掲げられている。この4条からなる申し合わせは第1回大会で定められたものである。

「常に進歩せる時代の思潮を汲み、見聞を広くし、思想の向上を計る」

「品性を高め、趣味を豊かにし、身体を練り、社会の一員としての強き信念と活動力を養う」

「時代に適合せざる陋習を斥け、生活の改造に力を尽くす」

「会員互いに協力し、組織的に行動することによって、更にその効果を大にすることに努む」

この第2条に掲げられた「品性を高め、趣味を豊かにし、身体を練り、社会

の一員としての強き信念と活動力を養う」の具体的な一事例として、ピアノを弾くこと、ピアニストとして舞台上で演奏することが捉えられ、そのイメージを担う具体的な存在としてピアニスト小倉末子があったと考えられる。だからこそ、第2回大会（1920年）と第4回大会（1922年）に繰り返し出演を求められたのであろうし、「大阪未曾有の新しい試み」であった「大阪女子音楽会」（1921年）でも、700人に及ぶ女子の出演者たちのいわば手本として、小倉末子のゲスト出演が求められたと思われる。

大正8（1919）年にスタートした関西の婦人会連合は、落成間もない中之島公会堂に集い、「新しき婦人」のイメージをよく体现する存在として女性ピアニストを次々と招いた。そこに集う個々の女性団体（ピアノ同好会や大阪北区女教員会など）も、時にこの真新しい大ホールで大掛かりな催しを行って、しばしば女性ピアニストを招いた。そのような時代の流れの中で、小倉末子は「わが音楽界の誇りであるのみならず日本婦人界の最も大いなる誇りであり且つ輝きである」（1920年10月19日付『大阪朝日新聞』）と捉えられて、大阪市中央公会堂の舞台を繰り返し踏んだのであった。

*この研究は日本学術振興会平成22年度科学研究費補助、基盤研究(C)『『ピアニスト』の誕生を考える：明治末期から昭和初期の本邦洋琴家事情の解明』（課題番号 22520164）によって支えられていることを記して謝意を表する。

注

- 1 小倉末子の生涯については、津上智実編著『100年前の卒業生、ピアニスト小倉末子の軌跡—図録—』（神戸女学院「小倉末子展」実行委員会、2010年10月発行）（以後、『図録』と略記）を、その演奏活動については同書62-69頁の附録（2）「小倉末子演奏活動一覧」を参照。なお、戸籍上の本名は「小倉末」であるが、ピアニストとしての活動の多くを「小倉末子」として行っているのも、後者の表記を選んで用いることとする。
- 2 『北区史』（北区制100周年記念事業実行委員会、1980年）448-449頁による。現在は、座席のレイアウトが変更になったため、定員1161人となっている。

- 3 この調査に当たっては、大阪音楽大学音楽博物館の明治・大正期音楽記事資料集成を活用した。同館の全面的な協力で深く感謝申し上げる。
- 4 『大阪朝日新聞』の報道（1921年5月21, 22, 24, 27, 31日の広告記事）によれば、管弦楽団は50余名で、フルートに貫名美名彦、トロンボーンに萩原英一、ティンパニに高折宮次の名が見える。この3人はいずれも東京音楽学校のピアノ科教員であるが、オーケストラの不足セクションに入ったものと見える。
- 5 石月静恵『戦間期の女性運動』（東方出版、1996）（以後、「石月（1996）」と略記）44頁。
- 6 同書、46頁。
- 7 「久野久子のピアノ独奏（リスト「リゴレット」、ショパン「ハ短調練習曲」、ベートーヴェン「月光」）、次いで岩田さと子が出島せい子の伴奏で歌劇「フィガロの結婚」の中のスザンナ、「連隊の娘」中のマリヤの2曲を独唱した」同書、54頁。
- 8 石月静恵『大阪朝日新聞にみる女性問題（2）—全関西婦人連合会に関する史料を中心に—』『桜花学園大学研究紀要』第5巻（155-170頁）の160頁に「ピアノ独奏、東京音楽学校教授小倉末子、一、ラプソディ「ママ」第一作品第四十九、ブラームス作曲、一、バラード作品第二十二、ショパン作曲」、同165頁に「音楽の部では小倉末子氏のピアノ、宇佐見ため子氏の伴奏で武岡鶴代氏の最高音独唱、何れも現代最高の芸術家の演奏であった」とある。
- 9 同、169頁に「音楽、ピアノ独弾、和泉千代子、独唱、柴田秀子、伴奏、榊原直」とあるが、演奏曲目については言及がない。
- 10 『山岡春関係文書目録』（山岡家文書刊行・保存会編、1988年）。『岸和田市史史料第4輯：岸和田地域婦人運動と山岡春』（同、1988年）。『山岡邦三郎文書目録、山岡春関係文書目録補遺』（同、2001年）。
- 11 貴重な資料の閲覧を許可された山岡家文書刊行・保存会の斎藤米子氏と山田裕美氏、また閲覧のお世話を下さった岸和田市役所生涯学習部郷土文化室の山中吾朗氏に御礼申し上げる。
- 12 ショパン〈序奏とロンド〉変ホ長調、作品16と考えられる。
- 13 石月（1996）、48頁。
- 14 音楽雑誌『音楽界』（1918年8月）掲載のピアノ同好会「内規」より。ピアノ同好会については、塩津洋子「ピアノ同好会の活動」『大阪音楽大学音楽博物館年報：音楽研究』第25巻（2010年5月）、1-14頁参照。
- 15 「ピアノ同好会の幹事でもあって声楽家」であり、「丈高い体に大柄の羽織など着込んで済ましている処は与謝野晶子女史を連想するが、会の為には矢張り熱心真面目な実行家である」（『婦女世界』4巻5号、31ページ）。石月（1996）170頁より引用。

- 16 高安やす子は高安病院高安道成の妻で、和歌のグループ紫絃社の中心人物。清楽会（1919年11月に第1回演奏会を開いた）や愛国婦人会大阪支部の理事。美人で『婦人画報』などにもしばしば写真が出たという。石月（1996）、170-171頁。
- 17 雑誌『婦女世界』（大正10年5月）（山岡春関係文書目録M-23）掲載「大阪の婦人団体とその活動」は、ピアノ同好会について、「大阪の婦人団体中でも趣味的で美しい集まりであるだけに、色彩の華やかな点に於いても白眉のものである。即ちピアノを中心として一般洋楽の振興を計り、会員の親睦と趣味技能を向上しようというのが目的、流石に物質万能で芸術等は無用の長物だとも云いかねない大阪で、あれだけのものを婦人の力で拵えあげたのは全く偉いと云わなければならない」「昔は単に応接間の装飾に過ぎなかったピアノも、今は全くの家庭楽器として、大抵の家に据えられて清い音色を慄わしている。それはわずかにこの二三年の進歩なのである」（24-27頁）等と伝え、主要メンバーを挙げている。このコピーを送って下さった山田裕美氏に御礼申し上げる。
- 18 ちなみに、神戸女学院同窓会からは1919年の発起人会に「ミス・デフォレスト、黒田治子、渡辺つね子、安田靖子」の4名、第2回大会代表者会には塚本ふじ子、同第3回に西川悦子、同第5回に藤田とき子が参加した。第5回には「神戸女学院長、デフォレスト」も参加している。
- 19 『図録』46頁に掲載。
- 20 1929年1月19日付『大阪朝日新聞』。このグランド・ピアノは「東京音楽学校ベッツォールド教授所有の独逸スタンウエル〔ママ〕会社製造の逸物で、女史は大阪市の音楽界の為め特に自己手馴れの愛品を譲ることになった」と報じられている。
- 21 この曲はその後、1922年3月27日の神戸女学院同窓会東京支部主催「音楽大演奏会」（神田青年会館）と1931年6月6日の「小倉・レーヴェ両女史演奏会」（日本青年館）でも演奏され、『月刊楽譜』第20巻9号（1931年9月）で出版された。
- 22 伊達俊光『大大阪と文化』（金尾文淵堂、1942）218-219頁。
- 23 その後、第3回（1921年）大会配布の『関西各地婦人会状況報告』（C-1-27）では29件中3件、第4回（1922年）大会配布の報告（C-1-42）では20件中1件しか音楽的な催しが含まれていない（下記の書抜き参照）が、これは女性問題に関する報告事項が増えたために、文化的な催しに関する記述が省略されたものかも知れない。

C-1-27「関西各地婦人会状況報告」（第3回（1921年）婦人会関西連合大会配布）
（29件中3件）

堺市連合婦人会（1921年5月、大浜公会、講演2本、音楽等）

近畿婦人連合大会（1921年6月5日、午前中神戸市中宮小学校に協議会、午後3時から兵庫県立高女校に大会、講演2本、会衆は「婦人会の歌」を合唱）（神戸

の婦人団体代表者は1月22日神戸女学院に連合茶話会を開き、関西婦人連合大会の決議に基づき、神戸連合婦人協会を組織した)
三重県婦人連合大会 (1921年7月17日、県会議事堂、講演2本、音楽会)

C-1-42「関西各地婦人会状況報告」(第4回(1922年)婦人会関西連合大会配布)
(20件中1件)

北陸婦人連合大会 (1922年9月21日、富山県会議事堂、講演1本、富山音楽研究会員の管弦等)

- 24 神戸大学社会科学系図書館所蔵の復刻版を閲覧させて頂いたことを記して感謝申し上げます。
- 25 『婦人』第2巻第5号には「逝ける久野久子女史」の写真の横に「女史の告別演奏と全関西婦人連合会」と題したコラムが掲載され、「大正12年3月外遊するに先立ち全関西婦人連合会の主催で」大阪市中央公会堂において告別演奏会を行った旨が記されている(53頁)。久野久子が「帰朝記念演奏会はぜひ全関西婦人連合会主催のもとにさせていただきます」と繰り返し言っていたと鍋平朝臣が同第8号の追悼文で書いている(24頁)のを考え合わせると、1923年の関西各地から京城、大連、上海に至る一連の告別演奏会は主として婦人連合会のネットワーク上で実現したのではないかと推測される。

Summary

Pianist OGURA Suye and the Activities of Women's Associations in Taisho Osaka

TSUGAMI Motomi

This paper reports on the relationship of the musical activities in Osaka of the pianist OGURA Suye (1891–1944) and the early movements of women's associations in Kansai district in Taisho JAPAN. Ogura played piano every year from 1919 to 1923 on the stage of the Osaka City Hall in Nakanoshima, which was opened in November 1918, on the following occasions:

- 1) July 9th, 1919, 'Grand Concert', hosted by 'Gakuyu-kai' and by 'Piano Club' with female members of Osaka's upper classes.
- 2) October 25th, 1920, a stage in the second annual meeting of Kansai Fujin-kai Rengou (KFR), Association of Female Organizations in Kasai District.
- 3) July 2nd, 1921, a stage in the concert tour of Tokyo School of Music, where she was teaching.
- 4) October 2nd, 1921, a stage in the 'Osaka Female Concert', organized by Kitaku Jo-kyoin Kai (KJK), Female Teachers Assembly of the North-ward of Osaka City.
- 5) October 22nd, 1922, a stage in the fourth annual meeting of KFR.
- 6) November 11th 1923, solo charity recital for Futon fund for sufferers of the Great Kanto Earthquake, hosted by Zen-Kansai Fujin Rengo-kai (ZKFR), All Western Japan Association of Women's Organizations as developed from KFR.

Printed programs of 2) and 5) were newly found in the paper collection of YAMAOKA Haru in Kishiwada city, who was the chair of the preparation meeting of KFR in 1919 (YAMAOKA Haru Collection Catalogue Nos. C-1-18 & 44). The Piano Club, which appears in 1), is listed in 'the attendants list for the preparation meeting of KFR in 1919' (no. C-1-3) and KJK in 4) is listed in one of 1921 (no. C-1-21).

As a result, it has become clear that five of the above mentioned six concerts with OGURA were related to the early movements of women's associations in Taisho Osaka. In addition, the journal of ZKFR, *Fujin*, published from 1924, containing many articles on female pianists of the time, seems to present female pianists as models of 'new woman' of Taisho JAPAN.